桜

岡本かの子

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命（いのち）をかけてわが眺（なが）めたり

さくら花（ばな）咲きに咲きたり諸立（もろだ）ちの棕梠（しゅろ）春光（しゅんくわう）にかがやくかたへ

この山の樹樹（きぎ）のことごと芽ぐみたり桜のつぼみ稍（やや）ややにゆるむ

ひつそりと欅（けやき）大門（だいもん）とざしありひつそりと桜咲きてあるかも

丘の上の桜さく家(いへ)の日あたりに啼(な)きむつみ居(を)る親豚子豚

ひともとの桜の幹(みき)につながれし若駒(わかごま)の瞳(め)のうるめる愛(かな)し

淋しげに今年(ことし)の春も咲くものか一樹(ひとき)は枯(か)れしその傍(そば)の桜

春さればさくらさきけり花蔭(はなかげ)の淀(よど)の浮木(ふぼく)の苔(こけ)も青めり

ひえびえと咲きたわみたる桜花（はな）のしたひえびえとせまる肉体の感じ

散りかかり散りかかれども棕梠の葉に散る桜花（はな）ふぶき溜（たま）るとはせず

ならび咲く桜の吹雪（ふぶき）ぽぷらあの若芽（わかめ）の枝の枝ごとにかかる

わが庭の桜日和（びより）の真昼なれ贈りこしこれのつやつや

林檎（りんご）

青森の林檎の箱ゆつやつやと取り出（い）でてつきず桜花（はな）の樹（こ）のもと

林檎むく幅広（はばひろ）ないふまさやけく咲き満（み）てる桜花（はな）の影うつしたり

地震（なゐ）崩（くづ）れそのままなれや石崖に枝垂（しだ）れ桜は咲き枝垂れたり

しんしんと桜花（さくら）かこめる夜（よる）の家突（とつ）としてぴ、あ、の鳴りいでにけり

しんしんと桜花（はな）ふかき奥にいつぽんの道とほりたりわれひとり行（ゆ）く

せちに行けかし春は桜の樹下（こした）みちかなしめりともせちに行けかし

さくら花ひたすらめづる 片心（かたごころ） せちに 敵（かたき） をおもひつつあり

朝ざくら討たば討(う)たれむその時の臍(ほぞ)かためけりこの朝のさくら

あだかたきうらみそねみの 畜生(ちくしやう)が桜花(さくら)見てありとわれに驚く

わが 婢(はした) なにおもふらむ厨辺(くりやべ)の桜花(はな)の樹(こ)のもとにあちらむき停(た)てり

この朝の桜花(はな)の樹(こ)のもと小心の与作(よさく)もの、つ、と歩み出で

たり

わが幼稚（をさな）さひたはづかしし立ち優（まさ）り咲き揃（そろ）ひたる春花（はるはな）なれや

咲きこもる桜花（はな）ふところゆ一（ひと）ひらの白刃（しろは）こぼれて夢さめにけり

わがころも夜具（やぐ）に仕換（しか）へてつつましく掻（か）い寝（いね）てけり

月夜（つくよ）夜ざくら

角(つの)立ちのみじかきからに牛の角(つの)つのだち行けどふれず
さくらに

いみじくも枝垂(しだ)るるさくら日(ひ)の本(もと)の良子(ながこ)女王(によわう)が素直(なほ)き
おん眉(まゆ)

可愛(かあ)ゆしといふわが言の畏(かし)こけれ桜花(さくら)見ますかわが良
子ひめ

新しき家居(いへゐ)の門(かど)に桜花(はな)咲けど夜(よ)を暗み 提灯(ちやうちん)つけて出(い)
でけり

桜花(はな)さける道は暗けど一(いっ)しんに提灯ふりて歩みけるかも

わが持てる提灯の炎(ひ)はとどかずて桜はただに闇(やみ)に真白し

いっぽんの桜すずしく野に樹(た)てりほかにいっぽんの樹もあらぬ野に

桜ばな暗夜(やみよ)に白くぼけてあり墨一色(すみいっしき)の藪(やぶ)のほとりに

つぶらかにわが眼（め）を張（は）ればつぶつぶに光こまかき朝桜かも

ひんがしの家（や）の白かべに八重（やへ）ざくら淋漓（りんり）と花のかげうつしたり

さくら咲く丘のあなたの空の果て朝やけ雲の朱（しゆ）を湛（たた）へたり

わだつみの豊旗雲（とよはたぐも）のあかねいろ大和島根（やまとしまね）の春花（はるはな）に映（は）ゆ

ひさかたの光のどけし桜ちるここの丘辺（をかべ）を過ぐる葬列（さうれつ）

ほそほそと雫（しづく）しだるる糸ざくら西洋婦人濡（ぬ）れてくぐるも

糸桜ほそき腕（かひな）がひしひしとわが真額（まひたへ）をむちうちにけり

わが家（いへ）の遠（とほ）つ代（よ）にひとり美しき娘ありしといふ雨夜（あまよ）ざくら

真玉（まだま）なす桜花（はな）のしづくに白黒のだんだら犬がぬれて停（た）ちたり

折々（をりをり）にしづくしたたる桜花（はな）のかげ女靴（めぐつ）のあとのとびとびに残る

ほそほそと桜花（はな）の奥より見えて来る灯（ひ）にまさりたる淋しき灯なし

桜花（はな）の奥なにたからかに語り来る人ありて姿なかなか

見えず
糸杉（いとすぎ）のみどり燃えたりそのかたへふわふわ桜咲き白（しら）む
かも
桜さく丘にのぼれば遠（をち）かたの松ふく風の声かそかなり
この丘の桜花（さくら）のもとゆ見はるかす遠松原（とほまつばら）のほのぼのし
かも
松の間（ま）に桜さきたり松の葉の黒きひまよりうす紅（べに）ざく

ら

ミケロアンゼロの憂鬱（いううつ）はわれを去らずけり桜花（さくら）の陰影（かげ）
は疲れてぞ見ゆれ

桜花（はな）あかりさす弥生（やよひ）こそわが部屋にそこはかとなく淀（よど）
む憂鬱

かなしみがやがて黒める憂鬱となりて術（すべ）なし桜花（はな）のし
たみち

早春の風ひようひようと吹きにけりかちかちかちに莟(つぼ)む桜並木(なみき)を

かちかちにつぼむ桜の樹下(こした)みちしなび蜜柑(みかん)を曳(ひ)いて通るも

さくら咲くあかるき外(と)には立ちにけりわが衣(きぬ)の皺(しわ)にはかに著(しる)し

仁丹(じんたん)の広告灯が青くまた赤く照(てら)せり夜(よ)の桜ばな

桜花(さくらばな) 軒場(のきば)に近し頬(ほ)にあつるかみそりの冷えのうすら
さびしき

山川のどよみの音のすさまじきどよみの傍(そば)の一本(ひともと)桜

桜花(はな)さけど 厨(くりや) 女房いつしんに働きてあり釜(かま)ひかる厨

裏庭のひよろひよろ桜てふずばの手ふき手ぬぐひ薄汚(うすよご)
れたり

しんしんと家をめぐりて桜さくおぞけだちたり夜半(よは)に

めざめて

けふ咲ける桜はわれに要(えう)あらじひとの嘘(うそ)をばひたに数(かぞ)
ふる

さかんなる桜はわれになまぬるき「許しの心」あに教
ふべしや

薄月夜(うすづくよ)こよひひそかに海鳥(うみどり)がこの丘(をか)の花をついばみに
来(こ)む

この丘に桜散る夜(よ)なり黒玉(ぬばたま)の海に白帆(しらほ)はなに夢むらむ

夜(よ)は夜とて闇の小床(をどこ)に淡星(あはぼし)と語らふものか小(こ)ざくら桜

こよひわきて桜花(はな)の上なる暗空(やみぞら)に光するどき星ひとつ
あり

ひとり見る山ざくらばな胃を病(や)みてほろほろ苦き舌を
含(ふふ)めり

ねむたげな桜並木(なみき)を一声(ひとこゑ)の汽笛(きてき)の音がつつ走りけり

駅前の石炭の層にうらうらと桜花（はな）ちりかかる真昼なり
けり

自動車の太輪（ふとわ）の砂塵（さぢん）もうもうとたちけむりつつ道の辺（べ）
の桜

真白なる　鶏（くだかけ）ひとつ今朝（けさ）みれば血に染（そ）みてあり桜花（はな）の
樹（こ）のもと

空高く桜咲けどもわがたどる一本の道は岩根（いはね）こごしき

さくらばな咲く春なれや偽りもまことも来よやともに眺めな

日の本の春のあめつち豪華なる桜花の層をうちに築きたり

おのづから蔭影こそやどれ咲き満てる桜花の層のこのもかのもに

にほやかにさくら描かむと春陽のもとぬばたまの墨を

すり流したり

にほやかにさくら描(ゑが)きておみな子(ご)も金(かね)もうけむとおも
ひ立ちたり

おみな子の金もうくるを笑はざれ日本のさくら震後の
桜

日本の震後のさくらいかならむ色にさくやと待ちに待
ちたり

金ほしきおみなとなりて眺(なが)むれど桜の色は変(かわ)らざりけり

金ほしき今年の春のおのれかもいやうるはしと桜をば見つ

このわれや金とり初(そ)めの日(ひ)の本(もと)の震後の桜花(はな)の真盛りの今日(けふ)

停電の電車のうちゆつくづくと都(みやこ)の桜花(はな)をながめたるかも

桜さく頃ともなればわきてわが疲(つか)るる日こそ数は多けれ

かろき疲れさくらさく椽(えん)にかりそめの綻(ほころ)びもわがつくろはずけり

しばたたきうちしばたたき眼(め)を病(や)めるわれや桜をまともには見ず

さくら花(ばな)まぼしけれどもやはらかく春のこころに咲き

とほりたり

うつらうつらわが夢むらく遠方(をちかた)の水晶山に散るさくら
花

うちわたす桜の長道(ながて)はろばろとわがいのちをば放ちや
りたり

外(と)の面(も)には桜盛(さか)るをわが瓶(へい)の室咲(むろざ)きの薔薇(ばら)ははやもし
ぼめり

真黒くわれ 動(うごか)ざりあしたより桜花(はな)は窓辺(まどべ)に散りに散れども

ひそかなる 独言(ひとりごと)なれけふ聞きてあすは忘れよひともと桜

遠稲妻(とほいなづま)そらのいづこぞうちひそみこの夜桜(よざくら)のもだし愛(かな)しも

かきくもる大空のもとひそやかに息づきにつつこの丘の桜

かそかなる遠雷（とほいかづち）を感じつつひつそりと桜さき続きた
り

なごやかに空くもりつつ咲き盛（さか）る桜を一日（ひとひ）うち和（なご）めた
り

気難（きむづ）かしきこの家（や）の主人（あるじ）むづかしき顔しつつさくら
移植（うつ）させて居（を）り

歌麿（うたまろ）の遊女（いうぢよ）の襟（えり）の小桜（こざくら）がわが傘（からかさ）にとまり来にけり

政信（まさのぶ）の遊女の袖（そで）に散るさくらいかなる風にかつ散りにけん

うたかたの流れの岸に広重（ひろしげ）が現（うつつ）の桜花（はな）を描（か）き重ねたり

咲き倦（う）みて白くふやけし桜花（はな）のいろ欠伸（あくび）かみつつわが見やりたり

みちばたのさくらの太根（ふとね）玉葱（たまねぎ）を懇（ねもごろ）いだきわがいこひ

たり

ほろほろと桜ちれども玉葱はむつつりとしてもの言はずけり

何がなしかなしくなれりもの言はぬ玉葱に散り散り滑(すべ)るさくら

ここに散る桜は白し玉葱の薄茶(うすちや)の皮ゆ青芽(あをめ)のぞけり

春浅しここの丘辺(をかべ)の裸木(はだかぎ)の桜並木(なみき)を歩(あゆ)みつつかなし

さくら木のその諸立ち（もろだち）のはだか木にこもらふ熱を感ぜざらめや

松の葉の一葉（ひとは）一葉に濃（こま）やけく照る陽（ひ）のひかり桜にも照る

若竹（わかたけ）のあさきみどりに山ざくら淡淡（あはあは）と咲きて添（そ）ひ樹（た）てるかも

桜花（さくらばな）ちりて腐（くさ）れりぬかるみに黒く腐れる椿（つばき）がほとり

地を撲（う）ちて大輪（たいりん）つばき折折（をりをり）に落つるすなはち散り積むさくら

大寺（おほでら）の庭に椿は敷（し）き腐り木蓮（もくれん）の枝に散りかかる桜

ぼたん桜ここだく樹（た）てり尼（あま）たちが紐（ひも）かけ渡し白衣（びやくえ）干（ほ）すかも

鬱（うつ）として曇天（どんてん）のしたに動かざり梢（こずゑ）のさくら散り敷けるさくら

どんよりと曇天に一樹（ひとき）立つさくら散るとしもなく散る花のあり

一天（いってん）は墨（すみ）すり流し満山（まんざん）の桜のいろは気負（きお）ひたちたり

見渡せば河しも遠し河しもの瀬瀬（せぜ）にうつれる春花（はるはな）のかげ

急阪（きふはん）のいただき昏（くら）し濛濛（もうもう）と桜のふぶき吹きとざしたり

さやさやと竹さやぐからに出(い)でて見ればしんと桜が咲き居(ゐ)たるかも

塔(たふ)の沢のいかもの店に女唐(めたう)停(た)ちその向(むか)つ峰(を)の桜花(はな)盛りなり

いかものを女唐買ひたりその女唐箱根の桜花(はな)の下みちを行く

わがままはやめなとぞおもへしかはあれ春さり来れば桜さきけり

桜花（はな）の山は淡墨（うすずみ）いろに暮れにけり 大烏（おほがらす） 一羽ひつそり帰る

大暴風（おほあらし）うすずみ色の生壁（なまかべ）にさくら許多（ここだ）くたたきつけたり

ここにして桜並木（なみき）はつきにけり遠浪（とほなみ）の音かそかにはする

桜花（はな）の山はうしろに高し見はるかす淡墨いろのたそが

れの海
いそがはしく吾（われ）を育ててわが母や長閑（のど）に桜も見で逝（ゆ）き
ませしか
十年（ととせ）まへの 狂院（きやうゐん） のさくら狂人（きちがひ）のわれが見にける狂院
のさくら
狂人のわれが見にける十年まへの真赤きさくら真黒き
さくら

狂人(きちがひ)よ狂人(きちがひ)よとてはやされき桜花(さくら)や云(い)ひし人間(ひと)や笑ひし

ふたたびは見る春無(な)けむ狂人(きちがひ)のわれに咲きけむ炎の桜

わが夫(つま)よ十年(ととせ)昔のきちがひのわが恐怖(おそれ)たる桜花(はな)あらぬ春

ねむれねむれ子よ汝(な)が母がきちがひのむかし怖れし桜花(はな)あらぬ春

人間の交友（まじわり）のはてはみな儚（はか）な桜見つつし行きがてぬかなし

（来よと宣（の）らせる佐藤春夫氏に厚く謝しつつ）

桜花（はな）あかり 厨（くりや）にさせば 生魚鉢（なまざかなはち）に三ぼん冴（さ）えひかりたり

生ざかな光りて飛べりうす紅（べに）の桜の肌の澄（す）みの冷たさ

底本：「愛よ、愛」メタローグ
1999（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
1976（昭和51）年発行
※「椽（えん）」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2004年2月17日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。